

「定期総会」 開かる!

十一月十六日(金)長野市「経協会館」において、第十八期定期総会が開催され、予定した議案はすべて承認決定された。

R・ジグジッド大使からのメッセージ

長野県の皆さんこんにちは。本来なら会場にお邪魔して挨拶すべきところですが、公務のため失礼の段お許しください。長野県モンゴル親善協会の第十八期定期総会の開催に当たり、心からお慶びを申し上げます。

近年、両国の関係は「総合的パートナーシップ」の下で政治・経済・文化・教育・人的交流など全分野において成功裡に拡大・発展しています。2007年は両国外交関係樹立35周年という節目の年であり、特に春には我が国の大統領が日本国を訪問し、その際に「今後10年間両国の基本行動計画」が発表されました。

こうした両国関係の発展において、市民団体の果たす役割は大変重要なものであると確信しております。この場をお借りして、貴協会の18年間に亘る友好親善活動に対して心から感謝を申し上げます。

最後になりましたが、十八期総会のご成功と皆様のご健勝、ご多幸そして両国の友好親善のさらなる発展を祈念しお祝いのご挨拶と致します。

【第十八期(19.11.20.10)活動方針】

1. モンゴル国労働使代表の招聘を検討

- 2 研修生・留学生の支援
- 3 帰国した留学生、県内のモンゴル人との人的ネットワーク構築
- 4 モンゴル国と交流のある県内各大学との連携
- 5 視察団の派遣
- 6 各種イベントへの参加
- 7 会報の発行とホームページの開設
- 8 創立20周年準備

以上の活動に伴う収支予算として、1,384,243円(前年実績比+177,889円)を計上した。

議事に続いて「モンゴルで出会った子どもたち」と題して元JICAモンゴル隊員の西澤朋味さんによる記念講演、松本市在住のスチントさんの馬頭琴演奏が行なわれた。

総会終了後「県労働会館」において、親睦・交流会を行なった。ここに信大への留学生の参加もあって和気藹々の内に閉じることができた。

【記念講演抄録】

「モンゴルで出会った子どもたち」

JICA青年海外協力隊元モンゴル隊員

西澤 朋味

私は松本市の職員で保育士です。JICAから、青年海外協力隊員の一員としてモンゴルへ派遣され、2003年から2005年までモンゴルの保育園で活動を行ってきました。

私の赴任先は首都から220km北に位置するダルハン・ウール県の県都、ロシアの国境まで100kmという人口11万人のモンゴル第二の都市ダルハン市でした。ここは計画的に設立されたきれいな都市で、川や沼もあって農・工業が盛んでしたが、首都同様市内のアパート

や個建ての住宅に住む人がいると思えば、郊外の集落でゲルや木造の小屋に住んでいる人、家がなくアパートの入り口の階段下で生活していたり、以前は学生寮だった建物に何十世帯もの家族が密集して生活しているなど、貧富の差が大きくありました。ちゃんと職に就いている人もいれば、ゴミを収集して生計を立てたり、スリや強盗も少なくありませんでした。



配属先は、治療と保育の二本の柱で運営されているダルハン治療保育園で、子ども達は月曜日に登園し、金曜日に降園する寄宿制の保育園でした。親が仕事で忙しいとか、貧しくて子どもを面倒が見られない、親がいない子どもを預かる施設でした。モンゴルの保育内容は、小

学校のように国語・算数・音楽・体育・図工の授業があり、「お勉強」を先生が一方的に教えていることが主で、先生が子どもと一緒に遊ぶということもありません。言うことを聞かない子どもがいると、棒で叩くなどの体罰もありました。また、寄宿生とはいっても食事も質素で、生活習慣の指導も行き届いていないとはいえず、子どもへの理解が十分ではありませんでした。

この様な日本の幼児教育との差異に衝撃を受け、少しでも子どもへの理解がなされるように活動してきました。現在は、教育指導要領も変わってきているので、幼児教育のあり方や子どもへの理解も変化して来ている様です。子ども達はとても元気。秋の新学期前の長い夏休みには、田舎に戻り家族と共に、家畜の世話など両親の仕事を手伝い、小さい妹や弟の面倒をよく見るなど、家族の一員としてよく働き、家族を大切に思っている姿がうかがえます。今の日本に欠けて来ている事なのかもしれません。

そういった子どものみならず、日本の子どものように、携帯電話を持った富裕層の子どもがいる一方で、生活苦からマシホルチルドレンとなった子ども、街頭で物乞いをする子ども、孤児院に収容されている子どももいて、とても複雑な思いをしました。モンゴルの子ども達は貧しくて元気があり、生きていこうとする意欲がいっぱいです。物が溢れている満ち足りた環境の日本の子と、生きようとする力がいっぱい逞しいモンゴルの子では、どちらが幸せとは決め付けられません。与えられた環境で逞しく成長しているモンゴルっ子の姿に心を揺さぶられ、たくさん学ぶことがあった派遣活動でした。